

腹話術と信仰成長（1）

—傷ついた心の癒し—

「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され・・・彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」（イザヤ書53章5節）

クリスチャンのみなさんは、何のために腹話術をなさっていますか。クリスチャンだからといって、必ずしも伝道・証しのためにやらなくてはならないということはありません。趣味のひとつでも結構だと思います。けれども、神の子は、何をするにも主の栄光のためですから、たとえ趣味の範囲であっても、「キリストにあって」取り組むことになるでしょう。そうすると、腹話術という難しい技術を伴い、かつ人前で演じる芸術的なものを続けるには、祈りなくしてはできないと思います。そして、そのような取り組みの中で、必ずや、自分の信仰が問われ、学ぶことがたくさんあるのではないのでしょうか。

今日は、私個人的な体験からの証しを少しお分かちしたいと思います。

（1）児童伝道への導き

私は、今から40年前に、神学校の在学中に腹話術を習いました。「子どもたちに聖書のお話をするのに有効な視聴覚教材のひとつ」という感覚で始めた記憶しています。ところが、あまりにも人形がかわいくて、おしゃべりが楽しくて夢中になりました。そして、毎日かかさず練習して、どんどん上達していきました。すると、不思議なことに、卒業後は、あちこちの子ども会で用いられるようになり、とうとう、教会学校の子ども伝道と教師訓練という分野で奉仕するようになりました。それは、かれこれ10年間続いたものでした。

（2）傷ついた心

当時、腹話術子ども会というたくさんの子どもたちが集まりました。ところが、主催者側の心ない態度やことばで、私は、ひどく傷ついてしまったのです。腹話術なんて、所詮お笑い芸だ。腹話術で真面目な伝道メッセージなどで

きない。“人寄せパンダ”か“ちんどん屋”だ・・・等々。それらが私には、人形には価値がないというニュアンスに響き、従って、それをやっている私も奉仕者として価値がないかのように、心が痛んだのです。その結果、児童伝道に対する熱意も失い、「腹話術＝子ども」と思われることに、ひどく抵抗を感じるようになってしまいました。それからは、できるだけ大人対象の集会で奉仕できるように、内容も必死で大人向けの台本に挑戦していきました。

(3) 癒しへの道

このような深い心の傷を受けた過去の10年間に、根本的な解決には、何と30年もかかったのです。それは、今年のイースターで、どうしても子どもたちにメッセージを語らなければならない場が与えられた時でした。マルコ10：13～16から、自分がかつて教師訓練会で「子どもたちを軽んじてはいけない」と訴えていながら、それは本当の信仰告白ではなく、傷つけられたと感じていた私自身のプライドをかけた怒りであったと、聖霊により気づかせていただいたのです。その時、自分の罪の深さに愕然とし、自分は十字架につけられて当然の罪人であると認め、悔い改めさせられました。そして、十字架上のイエスさまから赦しのことばをいただき、やっと平安をいただいて、メッセージの奉仕をすることができたのです。

さらに、半年後、親しい信仰の友との会話の中で、懐かしい人形タカちゃんの記事が載っている本と、アメリカでの記念写真を見つめた時、やはり聖霊が私の人生を照らしてくださいました。30年前、タカちゃんと共にどれほど豊かに用いられたか。そもそも、神学校で、腹話術に出会わせてくださったのは、神さまだったのだ。神さまが私という人間をユニークに造ってくださり、私にふさわしい賜物として腹話術を与え、あの時代に、子どもたちにみことばを伝えるために用いてくださったのだ。私の人生は、これで良かったのだ！という喜びが魂の底からほとばしってきたのです。この時、過去に経験した“傷つけられた”という出来事は、すっかり癒され、恵みに変えられてしまいました。

腹話術は、自分の能力を誇示するためにあるのではなく、あくまでも、主を知るために、主によって与えられた賜物です。ですから、主はあえて苦しみを与え、その葛藤を通して、私たちの信仰を成長させてくださるのだと、今の私は信じていることができます。

